

Title	Luther 訳新約聖書におけるzweiとdreiについて : 本文及び助言に基づいて
Sub Title	
Author	角谷, 善朗(Kakutani, Yoshiro)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集 : 法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.320(103)- 348(75)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0320

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Luther 訳新約聖書における zwei と drei について

——本文及び序言に基いて——

角 谷 善 朗

I. 序

Martin Luther (1483—1546) によるドイツ語訳新約聖書は、Lutherdeutsch の研究資料として最も重要な文献であるが、同書の語法に関して調査する際には、各々の文書に添えられている Luther が書き下した幾篇もの序言についても、同じ問題点に関して調査することは欠かすことが出来ないと思われる。

九月聖書（1522年9月発行の Luther 訳新約聖書の初版）から添えられた序言においても、その後の改訂版から新たに加えられた序言においても、それぞれの時期における Lutherdeutsch が記録されており、さらに Luther 訳新約聖書の本文の場合と同じに、Luther によって改訂が続けられ、推敲が重ねられて行って、1546年発行の改訂版（Luther による最後の改訂となった）に至ったのであって、Luther 訳新約聖書の本文の語法と序言の語法とは極めて緊密な関係にあり、両者は是非合わせて見るべきものである。

Mhd. から Nhd. に移行する過渡期に当たる Frühnhd. については、語法に関しても種々の問題点を指摘することが出来るが、zwei と drei の変化¹⁾についての問題もその一つである。今回は、Frühnhd. において最も重視される Lutherdeutsch の代表的文献である Luther 訳新約聖書²⁾について本文及び序言の両者を合わせて、zwei と drei の変化の実際について調査を試みた結果を報告したい。

なお此の度の報告に至るまでに、先ず福音書について調査した結果を報告し、次に序言についても調査した結果を報告して部分的に検討して来たが、今回使徒行伝よりヨハネの黙示録までの調査の結果を加えて、Luther 訳新約聖書全般に及ぶ報告をまとめるに当たり、これ迄の調査をすべての面に渡って見直し、再検討することを心掛けた。

II. Luther 訳新約聖書における zwei の変化

本文及び序言の何れにおいても、zween, zwo, zwey が用いられ、本文にはこの外に zwene も用いられているので、「zwei は mhd. のように3性の区別がある」ことが認められるが、次の個所では、「3性の区別」を、明瞭に確かめることが出来る。

So aber deyn hand odder deyn fueß dich ergert, so hawbe yhn abe, vnd wirff yhn von dyr, Es ist dyr besser, das du tzum leben, lam odder eyn kropel eyn gehist, denn das du zwo hend odder zween fues habist, vnd werdist ynn das ewige fewr geworffen, vnd so dich deyn auge ergert, reys es aus, vnd wirffs von dyr, Es ist dyr besser, das du eyneugig zum leben eyngelist, denn das du tzwey augen habist, vnd werdist ynn das hellische fewr geworffen. (1522.¹ Matth. 18, 8-9.)

...Denn das du zwo hende oder zween Füße habest, vnd werdest in das ewige Fewr geworffen...denn das du zwey Augen habest, vnd werdest in das hellische Fewr geworffen. (1546.)

次に、zwei の個々の変化形について検討して行きたいが、zweiの用例について、zwei と関係している個々の名詞の性は、すべて現代ドイツ語の場合と同じものである。九月聖書には、「所属性が今と異なる名詞」また「色々な性を示す名詞」があるが、これらの名詞と zwei が関係している用例はない。

1. zween, zwene

15世紀に Sachsen ではなお *zwene* の使用が続いていたが, Oberd. では *zwen* (*zwenn*) だけが専ら用いられるようになっていた。そして Luther は oberd. の例に倣うことになるが、e を重ねて *zween* と表わしている。

本文と序言においては、*zween* の用例が遙かに多く、*zwene* は本文に1例現われているだけである。また初版の本文には、*zweenen* も1例見ることが出来るが、Luther 訳新約聖書においても、*zwene* の用例もあるが、その数は少なく、*zween* の用例が圧倒的な数を占めている Lutherdeutsch の特徴が、認められるのである。

zween は、初版の本文に76例、序言に1例用いられているが、'46年の版の場合は、本文に78例⁹⁾、序言に1例(1例)となっている。

初版の本文の用例のうち11例が *tzween* と表わされているが、'46年の版ではすべて *zween* に改められて統一されている。

Und da er von dannen furbaß gieng, folgeten yhm *tzween* blynden nach, die schriehen vnd sprachen, Ach du son David, erbarm dich vnser, (1522.¹ Matth. 9, 27.)

vnd die auff erden wonen werden sich *frewen* vber yhn, vnnd wol leben vnnd geschenck vnternander senden, denn dise *tzween* propheten, gueleten die auf erden woneten. (1522.¹ Off. 11, 10)

folgeten jm *zween* Blinden nach die schrien vnd sprachen, (1546.)

Denn diese *zween* Propheten queleten die auff Erden woneten. (1546.)

引用は2例とも1格の例であるので、次に4格の例を挙げる。

Wenn yemand das *gestz* Mosi bricht, der stirbt on erbarmung durch *tzween* odder drey zeugen, (1522.¹ Hebr. 10,

28)

durch zween oder drey Zeugen.

次に *zwene* は、4 格の例だけが見られる。

Denn es steht geschrieben, das Abraham hatte *zwene sone*,
eynen von der magd, den andern von der *freyen*, (1522.¹ Gal.
4, 22)

Denn es stehet geschrieben, das Abraham *zwene Sōne* hatte,
(1546.)

この場合に *zwene* はあとに名詞を伴っているのので、のちに Bodmer, Breitinger そして Gottsched (彼の場合は1762年刊行の *Sprachkunst* によって) が提唱し実践した、*zween* は附加語として、*zweene* は単独で用いた使い分け¹⁰⁾は行われていない訳である。Luther 訳新約聖書の本文及び序言では、あとに名詞を伴っていない用例でも、*zween* が使われている。

Vnd sie stelleten *zween*, Joseph genant Barsabas mit dem
zunamen Just, vnd Mathian, (1522.¹ Apg. 1, 23)

Vnd sie stelleten *zween*, (1546.)

この場合の *zween* が、定冠詞を伴っている用例が、初版の本文に1例、序言に1例と、

Es lieffen aber die *zween* zu gleich, (1522.¹ Joh. 20, 4)
vnnnd (Sanct Paulus) ertzelet, wo beyde sund vnnnd ge-
rechtigkeyt, todt vnd leben her kome, vnnnd hellt die *zween*
feyn gegen ander, Adam vnd Christum, (1522.¹ Vorrede auf
die Epistel S. Pauli an die Römer.)

強変化をしている形容詞を伴っている用例が、初版の本文に1例あるが、

Es war beyeynander Simon Petrus vnd Thomas, der da
heyst, zwillig, vnd Nathanael von Cana Gallilee, vnnnd die sone
Zebedei, vnnnd andere *zween* seyner iunger, (1522.¹ Joh. 21, 2)

この3例は凡て'46年の版に残されている。

Es lieffen aber die zween mit einander, (1546.)

Vnd helt die zween fein gegenander, Adam vnd Christum.
(1546.)

Vnd andere zween seiner Jünger. (1546.)

所有代名詞に続く附加語としての zween が変化語尾 -en をとっている用例が、初版の本文に現われている。

vnnnd ich will meyne zweenen zeugen geben, vnnnd sie sollen
weyssagen tausent zweyhundert vnd sechtzig tage, angethan
mit secken, (1522.¹ Off. 11, 3)

この語形はこの1例だけであって、'46年の版では zween に改められている。

Vnd ich wil meine zween Zeugen geben, (1546.)

Matth. 20, 21に類似した用例が出て来るが、この場合は -en はとっていない。

vnd er sprach tzu yhr, was wiltu? sie sprach zu yhm, las
dise meyne tzween sone, sitzen ynn deynem reych, eynen zu
deyner rechten, vnd den andern tzu deyner lincken. (1522.¹
Matth. 20, 21)

Las diese meine zween Sōne sitzen in deinem Reich, (1546.)

なおこの zween は、当時の他のドイツ語訳聖書には受け入れたものも多かったが、一般には、zwen の方が普及していた為に、zween は文法家からは手本とされながらも、16世紀さらに17世紀にも、なかなか馴染まれなかった。¹¹⁾

2. zwo

16世紀に zwo の外に、Alem. と Md. では zwuo が、Md. ではさらに zwuo が単母音化された zwu も使われているが、¹²⁾ Luther 訳新約聖書の本文

及び序言では、女性の Hauptform である zwo だけが用いられている。そしてこれは Luther 訳聖書全般についても通じることである。¹³⁾

初版の本文に 8 例、序言に 1 例出て来るが、'46 年の版でも本文に 8 例（8 例）、序言に 1 例（1 例）と変わっていない。初版及び '46 年の版の双方で、すべて zwo と表記されている。

dise sind zween olebawn vnd zwo fackeln, stehend fur dem
Gott der erden. (1522.¹ Off. 11, 4)

Diese sind zween Olebewme vnd zwo Fackeln, (1546.)

あとに名詞を伴わないで用いられている例は、本文で見られる。

Vnd so dich ymant nottiget eyn meyle, so gang mit yhm
zwo. (1522.¹ Matth. 5, 41)

so gehe mit jm zwo. (1546.)

3. zwey

初版の本文で 23 例、序言で 1 例見られるが、'46 年の版の本文で 23 例（23 例）、序言では 4 例（1 例）となっている。¹⁴⁾

既に引用してある Matth. 18, 9 の初版に tzwey の表記が見られるが、'46 年の版では zwey に改められている。

Matth. 18, 9 の用例は附加語として用いられている 4 格のものであるので、次に附加語的用法の 1 格の例を挙げる。

Die wort bedeuten etwas, denn dise weyber sind die zwey
testament, Eynes von dem berge Sina, das zur knechtschafft
gepirt, wilchs ist die Agar, (1522.¹ Gal. 4, 24)

Denn das sind die zwey Testament, (1546.)

この場合は前に定冠詞を伴っているので、無冠詞の例も示すことにする。

Da aber zwey iar vmb waren, kam Portius Festus an Felix
stad, (1522.¹ Apg. 24, 27)

Da aber zwey jar vmb waren, (1546.)

あとに名詞を伴っていない場合では、冠詞を伴っていない用例が、初版の本文に 2 例、'46年の版の本文に 2 例 (2 例) ある。

Vmb des willen wirt eyn mensch verlassen vater vnd mutter,
vnd seynem weybe anhangen, vnd werden zwey ein fleysch
seyn, (1522.¹ Eph. 5, 31)

vnd werden zwey ein Fleisch sein. (1546.)

更に定冠詞を伴っている用例も、初版の本文に 2 例、'46年の版の本文に 2 例 (2 例) ある。

vnd sprach, darumb wirt eyn mensch vatter vnd muter
lassen, vnd an seynem weybe hangen, vnd werden die zwey
ein fleysch seyn? (1522.¹ Matth. 19, 5)

vnd werden zwey ein Fleisch sein. (1546.)

引用した箇所は何れも旧約聖書の創世記のなかのことばと関わっているが、
また zwey は何れも Mensch と Weib と云う性の異なる名詞を、まとめてさ
すのに用いられているのである。¹⁵⁾
¹⁶⁾

4. 2 格

初版に 2 例、'46年の版に 2 例 (2 例) 見られる。2 例とも福音書で使われているが、何れも男性名詞の附加語として用いられている用例である。

そのうちの 1 例は、初版から zweyer と変化語尾—er をとっているが、

Auch stehet ynn ewrem gesetz geschrieben, das zweyer
menschen zeugnis war sey, (1522.¹ Joh. 8, 17)

das zweier Menschen zeugnis war sey. (1546.)

あとの 1 例の場合は、初版で変化語尾—er をとっていないものである。

Horet er dich nicht, so nym zu dyr noch eynen odder zween,
auff das alle sach bestehe auff zwey oder dreyer zeugen mund,

(1522.¹ Matth. 18, 16)

この例も '46年の版で変化語尾がつけられている。

auff zweier oder dreier Zeugen munde. (1546.)

Luther 訳新約聖書に現われている 2 格は、男性の 2 格だけであるが、その語形は、12世紀から18世紀までの 2 格の Hauptform の zweier¹⁷⁾ に従っている。

5. 3 格

15世紀から広く用いられたのは zweien¹⁸⁾ であるが、Luther 訳新約聖書では、三つの性の 3 格はそれぞれ異っている。先ず 3 格を表わしている語形は、初版と '46年の版とを合わせると 7 通りあることになるが、初版にはそのうちの 5 通り、'46年の版には 4 通りが見られる。

初版は本文に、zweyen が 6 例、tzweyen が 1 例、zween が 6 例、zwehen が 1 例、zwo が 3 例使われている。序言には用例は出て来ない。

'46年の版は、zweien が本文に 7 例 (5 例)、序言に 2 例、zween が本文に 6 例 (5 例)、zwo が本文に 3 例 (3 例)、zwei が序言に 1 例となっている。

男性の 3 格を示すのに用いられているのは、zweien (初版では zweyen、tzweyen と表わされている) と zween (初版では zwehen と表わされている) である。

'46年の版では、tzweyen が zweien に改められていたり、

Inn dissenn tzweyen gepotten hanget das gantz gesetz vnnd die propheten. (1522.¹ Matth. 22, 40)

In diesen zweien geboten hanget das gantze Gesetz vnd die Propheten. (1546.)

zwehen¹⁹⁾ が zween に書き改められたりして表記に統一が図られている。

vnnd da der Engel, der mit Cornelio redet, hynweg gangen war, rieff er zwehen seyner haußknecht vnnd eynem Gottfurchtigen kriegs kenecht, von denen die auf yhn wartten,

(1522.¹ Apg. 10, 7)

..., rief er zween seiner Hausknechte vnd einen gott-
fürchtigen Kriegsknecht, von denen die auff jn warteten,
(1546.)

註 上の例で、共に rufen の目的語である Kriegsknecht の格の書きかえに従って、初版の zwe-
hen は 3 格、'46年の版の zween は 4 格と判断される。

初版から zweyen が使われている例もあるが、

wilchen wollt yhr vnter disen zweyen, den ich euch soll los
geben? (1522.¹ Matth. 27, 21)

Welchen wolt jr vnter diesen zweien, den ich euch sol los
geben? (1546.)

また初版から zween が用いられている箇所もある。

Eyner aus den zween, die von Johanne horeten vnnd Jhesu
nachfolgeten, war Andreas, der bruder Simonis Petri, (1522.¹
Joh. 1, 40)

EIner aus den zween, die von Johanne hõreten, vnd Jhesu
nachfolgeten, (1546.)

さらに'46年の版では、zween が zweien に改められている例があるが、

wilcher vntter den zween hat des vaters willen than? (1522.¹
Matth. 21, 31)

Welcher vnter den zweien hat des Vaters willen gethan?
(1546.)

逆に zweyen が zween に改められている例もある。

Vnnd nach zweyen tagen war ostern vnd die tage sussen
brott, (1522.¹ Mark 14, 1)

VND nach zween tagen war Ostern, (1546.)

次の女性の 3 格についての報告で引用する Apg. 12, 6 の zween の初版の

用例も加えると、**zweien** と **zween** は、男性名詞の附加語としての用法と男性名詞と関係して単独に用いられる用法の双方を得ることが出来る。

男性名詞の附加語としての用法では、**zweien** の用例は、初版の本文に 5 例、'46年の版の本文に 4 例（4 例）、序言に 1 例あって、**zween** の用例は、初版の本文に 4 例、'46年の版の本文に 5 例（4 例）ある。

男性名詞と関係して単独に用いられる用法では、**zweien** の用例は、初版の本文に 2 例、'46年の版の本文に 3 例（2 例）あって、**zween** の用例は、初版の本文に 2 例、'46年の版の本文に 1 例（1 例）出ている。

従って二通りの用法にそれぞれ用いられた **zweien** と **zween** の用例数からは、**zweien** と **zween** のそれぞれが、二通りの用法の何れかに使い分けられているかは判断できない。

さて **zween** は、16世紀前半において、**Obersachsen** では専ら用いられた語形であったが、しかし当時の **Oberd.** では使われることは稀であって、**Oberd.** では16世紀の間 **zweien** の使用が続いたのであった。²⁰⁾

女性の3格を表わしているのは **-en** をとっていない **zwo** であって、**zwo** も **zween** と同じ様に、16世紀前半において、**Obersachsen** では普及していたが、当時の **Oberd.** では使われることは少なかったが、16世紀の終り迄に **Oberd.** に完全に²¹⁾ つけ込んで行くのである。なお16世紀より **Nebenform** となった **zwoen** や **zwuen**²²⁾ は用いられていない。

初版の本文に 3 例、'46年の版の本文に 3 例（3 例）あるが、3 例とも附加語として用いられている。

Vnd da yhn Herodes wollt fur furen, ynn der selben nacht
schlieff Petrus zwisschen zween kriegs knechten gepunden mit
zwo keten, vnd die hutter fur der thur hutteten des gefencknis.
(1522.¹ Apg. 12, 6)

in der selbigen nacht, schlieff Petrus zwischen zween
Kriegsknechten, gebunden mit zwo ketten, (1546.)

中性の 3 格として用いられているのは、'30年の版からの新しい Vorrede auf die Offenbarung S. Johannis. に見られる zweyen 1 例と zwey 1 例である。何れも定冠詞を伴って附加語として用いられている。

Hie sind nu die zwey thier, Eins, ist das keiserthum, das ander mit den zweyen hornern, das Bapstum, (1530.¹)

das ander mit den zweien Hörnern, das Bapstum, (1546.)

Lutherdeutsch で zwei と drei は定冠詞が冠せられても変化している例が多いが、次の場合は、定冠詞を伴って変化語尾 -en を欠いているものである。

das dennoch etliche frome lerer vnd Christen bleiben sollen, beyde vnter den zwey vorigen Weh vnd dem dritten künfftigen Wehe, (1530.¹ Vorrede auf die Offenbarung S. Johannis.) beide vnter den zwey vorigen wehen, (1546.)

III. Luther 訳新約聖書における drei の変化

筆者も1529年に出版された Hochalemanisch の文献である Züricher Prophetenübersetzung²³⁾ で, driu²⁴⁾ が使用されていることを報告したが,

O wol dem der erwartet/vnnd die tusend drühundert vnd fünff vnnd dryssig tag erreicht. (Dan. 12, 12)

Frühnhd. においても Alemanisch では driu²⁵⁾ の使用は続いていたのである。

しかし, Luther 訳新約聖書では, driu は用いられていないので,

im nom. und acc. lauten bei L. alle drei geschlechter un-
flectiert drey²⁶⁾

と指摘されている様に, Lutherdeutsch においては, drei は最早性による区別を行っていないことを明らかにすることが出来る。

1. drey

本文と序言を調査した結果、三つの性の 1・4 格についてすべての場合に使用されている用例を集めることが出来た。

即ち、男性 1 格の名詞と結合している附加語的用法は、初版の本文に 3 例、序言に 1 例²⁷⁾あって、'46 年の版では本文に 3 例 (3 例)、序言に 2 例となっている。

Vnd sihe, von stund an, stunden drey menner fur dem hause darynn ich war, gesand von Cesarien zu myr, (1522.¹ Apg. 11, 11)

von stund an stunden drey Menner fur dem hause, (1546.)

次にあとに名詞を伴っていないで、男性 1 格と関連している用例は、初版の本文に 1 例であり、'46 年の版の本文に 2 例 (1 例)、序言に 1 例見られる。

denn wo tzween odder drey versamlet sind ynn meynem namen da byn ich mitten vnter yhn. (1522.¹ Matth. 18, 20)

Denn wo zween oder drey versamlet sind in meinem Namen, (1546.)

序言に見られる用例は、前に定冠詞と弱変化の形容詞を伴っている。

Welche Weh sollen die andern drey, das ist, der funfft, sechst, siebend Engel ausrichten, vnd damit der welt ein ende. (1530.¹ Vorrede auf die Offenbarung S. Johannis.)

welche Weh sollen die andern drey, das ist, der fünfft, sechst, siebend Engel ausrichten, (1546.)

男性 4 格と関連しては、附加語としての用法が、初版の本文に 14 例、'46 年の版の本文にも 14 例 (14 例) 見られる。

Er gieng aber ynn die schule vnnnd handelte freydig drey monden lang, leret vnd beredet sie von dem reych Gottis, (1522.¹ Apg. 19, 8)

ER gieng aber in die Schule, vnd predigte frey drey monden lang, (1546.)

女性 1 格に関連しては、あとに名詞を伴っていない用例が、序言に 1 例出て来る。

Hie komen beide geistliche vnd leibliche verfolgung zusamen, der selbigen sollen drey sein, die erste gros, die ander noch grösser, die dritte am allen grösseten. (1530.¹ Vorrede auf die Offenbarung S. Johannis.)

Hie komen beide geistliche vnd leibliche verfolgung zusamen, derselbigen sollen drey sein, die erste gros, Die ander noch grösser, die dritte am allergrösseten. (1546.)

また女性名詞の 4 格と結合している用例が、初版の本文に 4 例、'46年の版の本文にも 4 例 (4 例) ある。

Denn gleych wie Jonas war drey tag vnnd drey nacht yn des walfisschis bauch, Also wirt des menschen son drey tag vnnd drey nacht seyn mitten ynn der erden. (1522.¹ Matth. 12, 40)

Denn gleich wie Jonas war drey tage vnd drey nacht in des Walfisches bauch, Also wird des menschen Son drey tage vnd drey nacht mitten in der Erden sein. (1546.)

中性 1 格に関連しては、附加語的用法とあとに名詞を伴わないで用いられている場合とがある。

附加語としての用法は、初版の本文に 1 例、序言に 1 例ある。'46年の版の本文にも 1 例 (1 例)、序言に 3 例 (1 例) ある。

vnnd ich horet eyn stym mitten vnter den vier thieren, sagen, Eyn mas weytzen vmb eynen pfennig, vnd drey mas gersten vmb eynen pfennig, vnd dem ole vnd weyn thu keyn leyd. (1522.¹ Off. 6, 6)

Ein mass weitzen vmb einen grosschen, vnd drey mass
gersten vmb einen grosschen, (1546.)

序言にある用例には、前に diese を伴っている例と、

Also sehen wyr das dise drey Capitel auff das eynige werck
des glawbens treyben, das da heyst, den allten Adam todten
vnd das fleysch zwingen. (1522.¹ Vorrede auf die Epistel S.
Pauli an die Römer.)

das diese drey Cap. vj. vij. viij. auff das einige werck des
glaubens treiben, (1546.)

前に定冠詞と弱変化の形容詞を伴っている例がある。

das die ersten drey Capitel, so von den sieben Gemeinen
vnd jren Engeln jnn Asia reden, nichts anders wollen, denn
einfeltiglich anzeigen, wie die selbigen dazu mal gestanden
sind, vnd vermanet werden, das sie bleiben vnd zunehmen,
odder sich bessern sollen, (1530.¹ Vorrede auf die Offenbarung
S. Johannis.)

das die ersten drey Cap...nichts anders wöllen, denn
einfeltiglich anzeigen, (1546.)

あとに名詞を伴わないで用いられている用例は、初版の本文に 4 例あって、
'46年の版にも 4 例（4 例）ある。

次の引用には、前に定冠詞を伴った用例も現われている。

Diser ists, der da kompt, mit wasser vnd blut, Jhesus
Christus, nicht mit wasser alleyne, sondern mit wasser vnd
blut, Vnd der geyst ists, der da zeuget, das geyst warheyt ist,
Denn drey sind die da zeugen, der geyst, vnd das Wasser, vnd
das blut, vnd die drey sind eynis. (1522.¹ 1. Joh. 5, 6-8)

Denn drey sind die da zeugen auff erden, Der Geist vnd

das Wasser, vnd das Blut, vnd die drey sind beysamen. (1546.)

また前に diese を伴った用例もある。

Nu aber bleybt, glawbe, hoffnung, liebe, dise drey, aber die liebe ist die grossist vnter yhn. (1522.¹ 1. Kor. 13, 13)

Nu aber bleibt Glaube, Hoffnung, Liebe, diese drey, aber die Liebe ist die grösset vnter jnen. (1546.)

中性 4 格に関連しても、附加語的用法とあとに名詞を伴わないで用いられている場合とがある。

附加語的用法は、初版の本文に 9 例、序言に 3 例見られるが、'46年の版の本文では 9 例 (9 例)、序言に 2 例 (2 例) となっている。

Elias war eyn mensch, gleich wie wir, vnd er betet eyn gepet, das es nicht regen solt, vnnd es regent nicht auff erden drey iar vnnd sechs monden, (1522.¹ Joh. 5, 17)

Vnd es regent nicht auff Erden drey jar, vnd sechs monden. (1546.)

あとに名詞を伴わないで用いられている用例は、初版の本文に 1 例で、'46年の版の本文では 1 例 (1 例) となっている。

Denn von nu an, werden funff ynn eynem haus spennig seyn, drey widder zwey, vnnd zwey widder drey, (1522.¹ Luk. 12, 52)

Denn von nu an, werden funff in einem Hause vneins sein, drey wider zwey, vnd zwey wider drey. (1546.)

序言に見られる用例は、何れも定冠詞を伴って使われているものである。

Also auch Sanct Paulus vnd Petrus Episteln, weyt vber die drey Euangelia Matthei, Marci vnd Luce furgehen. (1522.¹ Welches die rechten und edelsten Bücher des neuen Testaments sind.)

Am vierden, als nu durch die ersten drey Capitel, die sunden
offinbart, vnd der weg des glawben zur rechtfertigkeyt geleret,
(1522.¹ Vorrede auf die Epistel S. Pauli an die Römer.)

Das thut er durch die drey ersten Capitel. (1522.¹ Vorrede
auf die Epistel Epheser.)

初版の3例は、'46年の版では2例残っている。

Am iiiij. Als nu durch die ersten drey Capit. die sünde offen-
baret, vnd der weg des glaubens zur gerechtigkeit geleret ist,
(1546.)

Das thut er durch die drey ersten Capitel. (1546.)

2. 2格

初版の本文に3例現われているが、'46年の版では2例(2例)となってい
る。

次の用例は、前に冠詞類を伴っていない。

... auff zwey oder dreyer zeugen mund, (1522.¹ Matth. 18, 16)

... auff zweier oder dreier Zeugen munde. (1546.)

別の用例では、前に定冠詞を伴っている。

Vnnd ich sahe vnd horet eyn Engel fliegen mitten durch
den hymel vnd sagen mit lautter stym, weh, weh, weh denen
die auff erden wonen fur den andern stymmen der Posaunen
der dreier engel die noch posaunen sollen. (1522.¹ Off. 8, 13)

Weh, weh, weh denen die auff Erden wonen, fur den andern
stimmen der Posaunen der dreier Engel, die noch posaunen
sollen. (1546.)

1. Tim 5, 19 に現われている dreyer は、

Widder eynen eltisten nym keyn klage auff, ausser zweyen

odder dreyer zeugen. (1522.¹)

'46年の版では、

ausser zweien oder dreien Zeugen.

に改められている。Lutherdeutsch では außer の2格支配も行われていたが、²⁸⁾ここでは zweien に合わせて書き直されたのである。

3. 3格

3格は三つの性についての用例を集めることが出来る。

男性名詞と関連している用例は、初版の本文に13例ある。'46年の版の本文では14例(13例)である。

それらの用例のうちで附加語として用いられているものは、初版の12例、'46年の版の13例(12例)である。どの用例も前に冠詞類を伴っているものはない。初版では10例に変化語尾—en が現われているが、

Her wyr haben gedacht, das diser verfürer sprach, da er noch lebet, ich will nach dreyen tagen aufferstehen, (1522.¹ Matth. 27, 63)

Herr, wir haben gedacht, das dieser Verfürer sprach, da er noch lebet, Ich wil nach dreien tagen aufferstehen. (1546.)

2例は変化語尾—en をとっていない。

Vnnd Maria bleyb bey yhr bey drey monden, darnach keret sie widderumb heym. (1522.¹ Luk. 1, 56)

Nach dem nu Paulus gewonet war, gieng er zu yhn eyn, vnd saget yhn auff drey Sabbathen von der schrift, (1522.¹ Apg. 17, 2)

この2例のうち、Luk. 1, 56 の例には—en がつけられたが、

VND Maria bleib bey jr bey dreien monden, (1546.)

Apg. 17, 2 には—en はつけられないので、

vnd redet mit jnen auff drey Sabbathen aus der Schrift,
(1546.)

46年の版で—en をとっているのは12例（10例）になる。

初版に1例, '46年の版に1例（1例）が, あとに名詞を伴わないで用いられている。この例の場合前に diese を伴っている。

Wilcher dunckt dich der vnter dißen dreyen der nehist sey
gewesen, dem der vnter die morder gefallen war? (1522.¹
Luk. 10, 36)

Welcher düncket dich, der vnter diesen dreien der Nehest
sey gewesen, dem, der vnter die Mörder gefallen war? (1546.)

女性名詞と関連がある用例は, 初版の本文に2例あって, '46年の版の本文でも2例（2例）ある。

そのうちの1例は, 附加語的用法であって, 前に冠詞類は伴っていない。

Vnnd es begab sich vber eyn weyll bey dreyen Stunden, kam
seyen weyb ereyn, vnnd wuste nicht was geschehen war, (1522.¹
Apg. 5, 7)

VND begab sich vber eine weile bey dreien stunden, (1546.)

あとの1例は, あとに名詞を伴わないで, 前に diese を伴って用いられている。

von disen dreyen wart ertodtet das dritte teyll der menschen,
von dem fewr vnd rauch vnd schwefel der aus yhrem mund
gieng, (1522.¹ Off. 9, 18)

Von diesen dreien ward ertódet das dritte teil der Menschen,
(1546.)

この場合の drey が女性名詞と関連していることは, Off. 9, 20 で明らかになっている。

Vnd die andern menschen, die nit todtet wurden von disen

plagen, (1522.¹)

VND bleiben noch leute, die nicht getödtet wurden von diesen Plagen, (1546.)

中性名詞と関係している用例は、初版の本文に1例、序言に2例見られる。
'46年の版では、本文に1例、序言に1例(1例)となっている。

本文の1例と序言の1例は、附加語的用法のものであって、何れも冠詞類は伴っていないが、変化語尾-enをとっている用例と、

Darumb warnet er am andern cap. fur den falschen lerern zukunfftig, die mit wercken vmbgehen, vnd da durch Christum verleucken, vnd drawet den selben hart mit dreyen gewlichen exempeln, (1522.¹ Vorrede auf die zweite Epistel Petri.)

Vnd drewet denselbigen hart, mit dreien gewlichen Exempeln, (1546.)

変化語尾-enを欠いている用例とがある。

Vnd das geschach zu drey malen, vnd das gefeß wart widder auffgenommen gen hymel. (1522.¹ Apg. 10, 16)

Vnd das geschack zu drey malen. (1546.)

Lutherdeutschで zwei と drei が、附加語的用法で無冠詞の場合に変化語尾-enをとらないのは稀であると報告されているが、Luther 訳新約聖書で、-enをとっていない用例を男性と中性のについて、それぞれ1例得ることが出来る訳である。

初版の序言だけに見られる1例は、あとに名詞を伴わない用例であって、定冠詞及び弱変化の形容詞を伴って、変化語尾-enをとっているものである。

, ist Johannis Euangelion das eynige zartte recht hewbt Euangelion vnd den andern dreyen weyt weyt fur zu zihen vnd hoher zu heben, (1522.¹ Welches die rechten und edelsten Bücher des Neuen Testaments sind.)

IV. 結 び

Luther 訳新約聖書における *zwei* と *drei* の変化について、本文と序言を調査した結果を報告して来たが、用例を引用する際には、使徒行伝よりヨハネの黙示録までに現われているものを出来る丈挙げる様に心掛け、また福音書から引用の必要がある場合には新しい用例を紹介する様努めた。しかし、すでに報告してある福音書や序言からの引用も、他に代るものがない場合には、報告の趣旨に従って改めて引用することにした。

次に *zwei* と *drei* の変化を表にまとめて示して見たが、本文と序言を合わせて調査しても用例を得ることが出来なかった箇所は、空欄となっている。

なお本文だけに現われている変化形は無印にしてあるが、序言だけに現われている変化形には *v* を付けた。さらに本文にも序言にも出て来る変化形の場合は *+v* を付けた。これによって変化形の所在を明らかにしてあるが、この表示の方法はあとに出て来る Luther 新約聖書における *zwei* と *drei* 以外の基数及び序数の語形の報告の際にも用いてある。

zwei と *drei* の変化表で、*zwei* については、中性 3 格、*drei* に関しては、女性 1 格の 2 箇所は、1530年の版以降の序言だけに用例が見出される箇所である。

zwei の変化表

初版において

	男性	女性	中性
1 格	<i>zween tzween</i>	<i>zwo^{+v}</i>	<i>zwey</i>
2 格	<i>zweyer zwey</i>		
3 格	<i>zweyen tzweyen</i>	<i>zwo</i>	
	<i>zween zwehen</i>		
4 格	<i>zween^{+v} tzween</i>	<i>zwo</i>	<i>zwey^{+v} tzwey</i>

zwene zweenen

'46年の版において

	男性	女性	中性
1 格	zween	zwo ^{+v}	zwey ^{+v}
2 格	zweier		
3 格	zweien ^{+v} zween	zwo	zweien ^v zwey ^v
4 格	zween ^{+v} zwene	zwo	zwey ^{+v}

drei の変化表

初版において

	男性	女性	中性
1 格	drey ^{+v}		drey ^{+v}
2 格	dreyer dreier		
3 格	dreyen drey	dreyen	dreyen drey
4 格	drey	drey	drey

'46年の版において

	男性	女性	中性
1 格	drey ^{+v}	drey ^v	drey ^{+v}
2 格	dreier		
3 格	dreien drey	dreien	dreien ^{+v} drey
4 格	drey	drey	drey ^{+v}

zwei と drei の変化表で初版の語形と '46年の版の語形とを比較して見ると、zwei の場合、初版に見られる始音の z の tz による表記—これは九月³⁰⁾聖書の綴字の特色の一つであるが、'46年の版では tz は z に統一されてなくなっているが、その結果として、男性で3箇所と中性で1箇所の語形が整理さ

れ、統一されたことを確かめることが出来る。また男性では、**zwehen** と **zwe-
enen** という独特な語形が共に改められている。tz を z に統一する改訂は、
あとに出て来る **zwei** と **drei** 以外の基数及び序数の一覧表でも、該当する数
字に加えられていることが確かめられる。

さらに、初版にも **dreier** 及び **ein**³¹⁾ の例は出て来ているが、'46年の版では
—ey— は—ei—に統一して改められている。

これらのことから、Luther が1546年の最後の改訂版まで続けて行った数
々の改訂のうちの綴字と語形の面での成果の一端をうかがうことが出来るので
ある。

次に **zwei** と **drei** 以外の基数及び序数の一覧表を示したいが、序数の一覧
表で、'46年の版の序数が著しく減っているのは、各章の順序を示すのに、'46
年の版ではローマ数字を用いる様になった為である。

1. zwei と drei 以外の基数

初版において	'46年の版において
1 eyn** ein*	ein**
4 vier**	vier**
5 funff	fünff funff
6 sechs	sechs
7 sieben** siben	sieben**
8 acht	acht
9 neun	neun
10 zehen	zehen
11 eylff	eilff
12 tzwolff zwolff tzwelff	zwelff
14 viertzehen vierzehen	vierzehen
15 funfftzehen	funffzehen

18	achtzehen	achzehen
20	zwentzig	zwentzig
24	vier vnd tzwentzig vier vnd (vnnd) zwentzig	vier vnd zwenig
25	funff vnd tzwentzig	funff vnd zwenzig
30	dreyssig	dreissig
38	acht vnd dreyssig	acht vnd dreyssig
40	viertzig	vierzig
42	zween vnd (vnnd) viertzig	zween vnd vierzig
46	sechs vnd viertzig	sechs vnd vierzig
50	funfftzig	fünffzig funffzig
60	sechtzig	sechtzig
70	siebentzig	siebentzig
75	funff vnd siebentzig	fünff vnd siebnzig
80	achtzig	achzig
84	vier vnd achtzig	vier vnd achzig
99	neun vnd neuntzig	neun vnd neunzig neunvnd neunzig
100	hundert	hundert
120	hundert vnnd zwentzig	hundert vnd zwenzig
144	hundert vnd vier vnd viertzig	hundert vnd vier vnd vierzig
153	hundert vnd drey vnd funfftzig	hundert vnd drey vnd funffzig
200	zweyhundert	zwey hundert
276	zwey hundert vnd sechs	zwey hundert vnd sechs

	vnd siebentzig	vnd siebenzig
300	drey hundert dreyhundert	drey hundert dreyhundert
400	vierhundert	vier hundert vierhundert
450	vierhundert vnd funfftzig	(drey hundert vnd funffzig)
500	funff hundert	fünff hundert
666	sechs hundert vnd sechs vnd sechtzig	sechs hundert vnd sechs vnd sechzig
1000	thausent tausend tausent**	tausent**
1260	tausent zweyhundert vnd sechtzig	tausent zwey hundert vnd sechzig
1600	tausent sechshundert	tausent sechshundert
2000	zwey tausent	zwey tausent
3000	drey tausent	drey tausent
4000	vier tausent	viertausent
5000	funff tausent	fünff tausent
7000	sieben tausent	sieben tausent
10000	tzehen tausend zehen tausent	zehen tausent
12000	tzwelff tausent	zwelff tausent
20000	zwentzig tausent	zwentzig tausent
23000	drey vnd zwentzig tausent	drey vnd zwenzig tausent
50000	funfftzig tausent	funffzig tausent
144000	hundert vnd vier vnd	hundert vnd vier

viertzig tausent

vnd vierzig tausent

2. 序数

初版において

'46年の版において

- | | |
|---|----------------------|
| 1. erst ⁺ | erst ⁺ |
| 2. ander ⁺ | ander ⁺ |
| 3. dritt ⁺ | dritt ⁺ |
| 4. vierd ⁺ | vierd |
| 5. funff ⁺ | funfft |
| 6. sechst ⁺ | sechst |
| 7. siebend ⁺ sibend siebent | siebend ⁺ |
| 8. acht ⁺ | acht |
| 9. neunnd ⁺ | neund |
| 10. zehend ⁺ zehendt | zehend tzehend |
| 11. eylfft ⁺ | eilfft eylfft |
| 12. zwelfft ⁺ | zwelfft |
| 13. dreytzehend ⁺ | |
| 14. viertzehend ⁺ vierzehend | vierzehend |
| 15. funffzehend ⁺ | funffzehend |
| 16. sechtzehend | |
| 17. sibenzehend siebentzehend | |
| 18. achzehend achtzehend | |
| 19. neunzehend neuntzehend | |
| 20. zwentzigist zwentzigst | |
| 21. eyn vnd zwentzigst | |
| 22. zwey vnd zwentzigst | |
| 23. drey vnd zwentzigst | |

24. vier vnd zwentzigst
vier vnd zwentzigst
25. funff vnd zwentzigst
26. sechs vnd zwentzigst
27. sieben vnd zwentzigst
28. acht vnd zwentzigst

(1983・5・24)

- 1) 例えば Vom Spätmittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen Synoptischer Text des Propheten Daniel in sechs deutschen Übersetzungen des 14. bis 16. Jahrhunderts hrsg. von Hans Volz 1963. に収められている資料を参照した場合。
- 2) 調査のテキストは、D Martin Luthers Werke Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Die Deutsche Bibel Bd. 6,7. Weimar 1929—1931. である。
- 3) 角谷善朗「Luther 訳新約聖書における zwei と drei について——福音書に基いて——」東京理科大学ドイツ語教室紀要「櫻筍」第2輯（昭和43年9月）
- 4) 角谷善朗「zwei と drei について——Luther 訳新約聖書の序言に基いて——」教養論叢第39号 一ノ瀬恒夫先生退職記念論文集（昭和49年10月）。
- 5) 塩谷 鏡氏「ルター聖書のドイツ語」（1975年）のうち「Luther 聖書初版のドイツ語」の「第2章 形態論」の「Ⅲ. 教詞」。
- 6) 塩谷 鏡氏「ルター聖書のドイツ語」（1975年）のうち「Luther 聖書初版のドイツ語」の「第2章 形態論」の「Ⅰ. 名詞」。
- 7) Eugen Stulz: Die Deklination des Zahlwortes zwei vom XV. bis XVIII. Jahrhundert; in Zs. f. dt. Wortf. Bd. 2 1902. §2. 及びJ. Grimm—W. Grimm: Deutsches Wörterbuch Bd. XVI 1954. zwei の項。
- 8) 註7) の Stulz の論文 §2。
- 9) '46年の版における本文及び序言の用例数のあとに続く括弧に囲まれた用例数は、1546年の Luther 自らの最後の改訂版に、最初の用例と同じものが幾例残されているかを示している。
- 10) 註7) の Stulz の論文 §2及び Grimm の辞書 zwei の項。また H. Paul: Deutsche Grammatik Bd. II 6. Aufl. 1959. §140. Anm
- 11) 註7) の Stulz の論文 §2。
- 12) 註7) の Stulz の論文 §3, 及び Gimm の辞書 zwei の項。
- 13) 註7) の Stulz の論文 §3。
- 14) '46年の版の序言で3例増えているのは、'30年の版から Vorrhede auff die offenbarung Sanct Johannis. が、内容が詳細なものに書き改められたことに依るものである。
- 15) Darumb wird ein Man seinen Vater vnd seine Mutter verlassen vnd an seinem Weibe hangen vnd sie werden sein ein Fleisch. (1545. I. Mose 2, 24)

Luther 訳新約聖書における zwei と drei について (角谷)

引用は、D. Martin Luther Werke Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Die Deutsche Bibel Bd. 9/8. Weimar 1934. に拠る。

- 16) August Engelen: Grammatik der neuhochdeutschen Sprache 5. Aufl. 1902. § 76.
- 17) 註7) の Grimm の辞書 zwei の項。
- 18) 註7) の Grimm の辞書 zwei の項。
- 19) 塩谷 饒氏は、

「ehe が二音節を表わすものでないことは ehren の命令形が ehere と記されている所からも分る。

Ehere deyn vater vnd mutter (Mc. 10)—Ehre deyn Vater…… (Eph. 6)」「(ルター聖書のドイツ語) (1975年) のうち「Luther 聖書初版のドイツ語」の「第1章 つづりと語音」の「I. 母音の表記」)

と指摘されておられるが、zwehen の ehe の場合もこの場合と同じ様に表記されたものと判断される。

なお、九年聖書からの引用の部分は、'46年の版では次の様に表わされている。

Ehre deinen vater vnd mutter (1546.)

Ehre vater vnd mutter, (1546.)

- 20) 註7) の Stulz の論文 § 4.
- 21) 註7) の Stulz の論文 § 4.
- 22) 註7) の Grimm の辞書 zwei の項。
- 23) 註1) の Hans Volz 編の Vom Spätmittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen に集録されている。
- 24) 註3) の角谷の論文。
- 25) Virgil Moser: Historisch—grammatische Einführung in die frühneuhochdeutschen Schriftdialekte 1909. § 166.
- 26) Ph. Dietz: Wörterbuch zu Dr. Martin Luthers Deutschen Schriften 2., unveränderte. Aufl. 1961. Drei の項。
- 27) 初版の drey の用例が見られた wilchs die rechten vnd Edlisten bucher des neuen testaments sind. は、'34年の版から全文が省かれてしまったので、'46年の版の用例は '30年の版からの Vorrede auf die Offenbarung S. Johannis に出て来るものである。
- 28) Carl Franke: Grundzüge der Schriftsprache Luthers Bd. III 2. Aufl. 1922 § 83.
- 29) Carl Franke: Grundzüge der Schriftsprache Luthers Bd. II. 2. Aufl. 1914. § 114.
- 30) 塩谷 饒氏「ルター—聖書のドイツ語」(1975年) のうち「Luther 聖書初版のドイツ語」の「第1章 つづりと語音」の「II. 子音の表記」
- 31) 角谷善朗「動詞の2格目的語について——Luther 訳新約聖書の序言に基いて——」教養論叢 第59号 高橋文雄先生退職記念論文集 (昭和57年3月)。
- 32) 塩谷 饒氏「ドイツ語学入門」(1967年)「第4章 ドイツ共通語の歴史」の § 5. 及び、H. Moser: Deutsche Sprachgeschichte 4. überarbeitete Aufl. 1961. S. 145.

参考文献

(既に註で挙げたものは繰り返さない)

I. 聖書

1. Das Neue Testament nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers Revidierter Text 1956 5., Aufl. 1962.
2. Das Neue Testament nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers Revidierter Text 1975. 1978.
3. Menge-Bibel 11., Aufl. 1961.
4. Zürcher Bibel 1942.
5. Die Bibel Altes und Neues Testament Einheitsübersetzung 1980.
6. Das Neue Testament Deutsch 11 Bde. 1963—1966.
7. E. Nestle et K. Aland: Novum testametum graece 25. Aufl. 1967.
8. 日本聖書協会：新約聖書（1954年改訳）1963。
9. 共同訳聖書実行委員会：新約聖書 1981。
10. 山谷省吾・高柳伊三郎・小川治郎編：増訂新版新約聖書略解 1965。

II. 辞書

1. J. Ch. Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart 4 Bde. 2., vermehrte und verbesserte Ausg. 1798—1801.
2. H. P. Althaus—H. Henne—H. E. Wiegand: Lexikon der Germanistischen Linguistik II 1973.
3. J. H. Campe: Wörterbuch der Deutschen Sprache 5 Bde. 1807—1811.
4. A. Götze: Frühneuhochdeutsches Glossar 6., Aufl. 1960.
5. A. Götze—W. Mitzka: Trübners Deutsches Wörterbuch 8 Bde. 1939—1957.
6. M. Heyne: Deutsches Wörterbuch 3 Bde 1890—1895.
7. H. Paul—A. Schirmer: Deutsches Wörterbuch 7., bearbeitete Aufl. 1960.
8. H. Paul—W. Betz: Deutsches Wörterbuch 5., völlig neubearbeitete und erweiterte Aufl. 1966.
9. D. Sanders: Wörterbuch der Hauptschwierigkeiten in der deutschen Sprache 43. und 44. Aufl.
10. D. Sanders: Wörterbuch der Deutschen Sprache 2., Abdruck 1876.

III. 文法書

1. O. Behaghel: Deutsche Syntax Bd. I 1923.

Luther 訳新約聖書における zwei と drei について (角谷)

2. Fr. Blatz: Neuhochdeutsche Grammatik Bd. I 1900.
 3. J. Kehrein: Grammatik der deutschen Sprache des funfzehnten bis siebenezhnten Jahrhunderts Teil 1—3 1854—1856.
 4. R. v. Kienle: Historische Laut—und Formenlehre des Deutschen 1960.
 5. V. Moser: Frühneuhochdeutsche Grammatik I. 1. 1929.
 6. H. Paul—W. Mitzka: Mittelhochdeutsche Grammatik 18., Aufl. 1960.
 7. H. Paul—H. Stolte: Kurze deutsche Grammatik 3. verbesserte Aufl. 1962.
 8. 相良守峯: ドイツ語学概論 1950.
 9. 田中康一: ドイツ文法通論 1951.
- IV. 語史
1. A. Bach: Geschichte der deutschen Sprache 8., stark erweiterte Aufl. 1965.
 2. H. Eggers: Deutsche Sprachgeschichte Bd. III 1969.
 3. W. Schmidt: Geschichte der deutschen Sprache 1969.
 4. F. Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache Teil II 1969.
 5. 小島公一郎: ドイツ語史 1964.